

エスニックツーリズムと民族料理 中国内モンゴル自治区中部の事例より

尾崎孝宏（鹿児島大学）

本発表では、中国内モンゴル自治区中部における観光施設である「旅遊点」で展開されるエスニックツーリズムの事例から、トランスカルチュラル状況の食文化の在り方について考察を加えることを目的とする。

本発表で考察対象とする「旅遊点」は「旅遊景点」とも呼ばれる。もともとは漢語の単語であるが、モンゴル語でも「リーヨウディエン」と漢語のまま表現される。本発表で取り上げる内モンゴル自治区中部のほか、甘肃省や青海省の少数民族（ユグール族、チベット族）地域でも 2000 年代前半には営業開始している。

「旅遊点」は風光明媚な場所に建てられることが多い。牧畜地域であれば、5 から 20 程度のテントが建たれ、そこで飲食などができる。経営規模は小規模であるため、個人営業のものも少なくない。

「旅遊点」はその立地とは無関係に、基本的にレストランであるため、主な活動場所は屋内である。漢民族を主とする訪問客も、多くは風景を鑑賞するわけでもなく、到着とともにテントに入り、飲食に興じることが一般的な行動パターンである。

そこで提供される食事は、モンゴル族地域であれば民族風の茶、冷菜、メイン（手把肉、烤羊排など）、主食（餃子など）などが中心で、基本的に中国のコース料理の文法に即して構成される。さらに接待の宴席であれば蒸留酒（白酒など）は必須であり、カラオケやライブでの歌舞もオプションで付加できる。

上述したような都市から離れた場所で料理が提供されるという形態は、漢民族地域における「農家樂」

（農家レストラン）との類似性が高い。「農家樂」は現在、個人旅行者向けの営業形態として人気があり、発表者が知る限り 2000 年代前半には現在より数が少ないとはいっても既に存在していた。

そのため「旅遊点」は少数民族地域版の「農家樂」として理解することは可能だが、「農家樂」が料理のみに特化しているのに対し、「旅遊点」にはエスニックツーリズム的要素が付加されている点などに相違を見出すことができる。現状における「旅遊点」の特徴は、以下の 3 点にまとめられる。

1. 小規模な民族テーマパークとも解釈できるが、飲食および関連する娯楽に特化している点が顕著である。例えばヒツジの解体も、見世物とはなっていない。
2. もともと地方政府への客人を主たる対象とした接待向け施設であり、地方政府幹部の親族が経営している事例が多数みられる。宿泊可能な施設も存在する。
3. 現状としては中央政府の締め付けにより、公費の

高額飲食が望めなくなり、個人旅行客を対象とした規模拡大や屋外での活動の充実に活路を求める傾向がある。

本発表の後半では「旅遊点」の特徴として挙げられる、テーマパーク的要素および民族料理について考察する。

中国のエスニックツーリズムは、基本的には漢民族が少数民族をまなざす形態として成立している。これは 1 億人以上の人口を有する漢民族と、例えばモンゴル族の例で 600 万人弱という圧倒的な人口比による必然的な結果である。なお中国の観光業は、2018 年度上半期の国内旅行者数が 28 億人以上、旅行者の増加率が年 10% 以上という巨大成長産業である。

この中に「民族」（少数民族）を消費の対象とするエスニックツーリズムも位置づけられ、その一形態として少数民族文化をテーマとした建物とパフォーマンスを観光客に展示する民族テーマパークがある。その先駆的存在として北京の中華民族園（2001 年完成）が挙げられ、そこでは民族別に住居と生活が展示されている。

地方の少数民族地域においても、1 つないし複数の民族を展示対象とした民族テーマパークが林立している。こうした民族テーマパークでの表象は、公定化された記載に準拠したものが多いため、展示やパフォーマンスについては他民族を参照している事例も存在する。こうした傾向は、飲食に特化しているとはいって「旅遊点」で提供される歌舞などの娯楽にも共通している。

筆者が 2013 年に四子王旗ゲゲンタラ付近の「旅遊点」（個人営業）で提供される食事を分析した結果、基本的には都市部の「モンゴル料理」をうたうレストランで提供されるメニューと共通することが明らかになった。こうした場所で提供される料理と一般家庭の食生活の間には料理のレパートリー、野菜の使用量、肉の提供量などにおいて明確な差異が存在する。

中国のエスニックツーリズムにおいて、部外者の「民族」経験は、ある種の画一化がなされがちである。またその中には、「旅遊点」の存立構造のように漢民族の嗜好性が反映されていることも間違いない。ただし都市部の民族料理店の客には漢民族だけでなく少数民族自身も多いことから、そのメニュー構成の全てを漢民族のまなざしに帰することもまた不適切であると思われる。

観光には異文化接触における身体性の適度な調節が不可欠である。民族料理経験も同様であり、しかもその調節がより容易かつ強く要求されるジャンルである。

*本研究は 2018 年度サントリー文化財団助成研究「文化と身体の交差点としての食：文化固有性・産業化・異業種ネットワーク」（代表：風戸真理）の一部である。

キーワード：中国、少数民族、ツーリズム、民族料理